

# 万葉集を「読む」

小野 寛

一

万葉集を読むとはどういうことかが問ひ直されて、平成五年十一月の上代文学会シンポジウムに「読みへの提言」が実現した。千二百年から千三百年も前のことばによる作品——を讀むことは問題が多い。読み手によって、読み手の求めるところによって、読み方は違ってくる。しかし万葉集研究という学問研究の立場では、目指すところは一つ、正しく讀むことである。家持なら家持の、その作品に表現しようとしたことを正しく理解することである。

今から千二百年も、千三百年も前の一つ一つのことばの意味を、私たちはその語られた時代のものとして理解しなければならぬ。

平成五年六月、上代文学会研究例会で、今回のシンポジ

ウムの講師の一人である多田一臣氏が「玉梓の路—三九七八番の表現をめぐって」と題して、家持の三九七八番歌の表現について考察され、新しい指摘をされたことは記憶に新しい。

：ほととぎす 来鳴かむ月に いつしかも 早くなり  
なむ 卯の花の にほへる山を よそのみも 振り放  
け見つつ 近江路に い行き乗り立ち あをによし  
奈良の我家に：（卷十七・三九七八）

その一つに、近江路に「乗り立つ」という普通でない表現に注目して「乗る」という動詞について考察された。「乗る」は「告る」に通じ、「名をのる」「占にのる」など、古くは呪的な表現で、祝福にも呪詛にもなった神意のこもることばであるという。万葉集には「船に乗る」などの他に「心に乗る」が十一例ある。

東人の荷向の篋の荷の緒にも妹は心に乗りけるかも  
(巻二・一〇〇、久米禪師)

もしもきの大宮人は多かれど心に乗りて思ほゆる妹  
(巻四・六九一、大伴家持)

など、「妹は心に乗りけるかも」は六例もあって、一種の慣用句となっていた。恋しい人が心に入りこんで、心にかぶさって、心を占拠してしまうことをいうに違いない。「心に乗る」とは見事な表現だと私などは感心してしまう。この「乗る」に呪的な意味があり、神意をもって支配する意をこめて読むとなると、万葉人たちが、家持までもが、遙かな神の世界へ消えていってしまう。

家持の「近江路にい行き乗り立ち」の「路に乘る」例は、古歌集中の旋頭歌に、

海原の路に乗りてや我が恋ひ居らむ 大舟のゆたにあ  
らむ人の子故に(巻十一・二三三六七)

とある。「路に乘る」は集中この二例のみで、古事記上巻に山幸彦火遠理命に塩椎神が教えるくだりに、

我其の船を押流さば、やや暫しいでませ。味し御路有  
らむ。乃ち其の道に乗りていでましなば、魚鱗なす造  
れる宮室、其れ綿津見神の宮ぞ。

とある。「古事記伝」は「此の道は、尋常の陸なる道にあら  
ず。水の中なる故に、乗と云る、おもしろし」という。水

中にある道だからなせ「乗る」というのか分らない。西郷信綱『古事記注釈』は「船路なので『乗る』といった」という。倉野憲司『古事記全註釈』は「道のまにまにか道にまかせてとかの意に解すべきであらう。その潮路に小船を乗り入れて(潮流に随って)である」とある。塩椎神の作った「無間勝間の小船」に乗って、その道を行くことをいうと私は読んでいる。

家持の「近江路にい行き乗り立ち」も古歌集の「海原の路に乗りて」も、「乗って」行くのであろう。家持は馬に乗って、海原の路は船に乗って。家持が、律令制下の大道北陸道を律令官人として行くのである。呪言としての「のる」はもうそこにはない。

## 二

世間は数なきものか 春花の散りのまがひに死ぬべき  
思へば(巻十七・三九六三三)

シンポジウムで第一講師中川幸廣氏が選んだ家持の、死を春の花の散り乱れる中に美しくとらえた歌である。天平十九年(七四七)二月二十日、越中国守館に病臥して作った最初の歌で、「忽ちに枉疾に沈み、殆と泉路に臨む。仍りて歌詞を作り、以て悲緒を申ぶる一首」と題する長歌(三

九六二)の反歌二首の第一首である。その長歌に家持は、越中に下つてまだ一息いれる間もなく、勿論年月もまだ経たないうちに病いに臥して、苦しみは日増しにつのり、都に残して来た母と妻と子供たちを思い、恋しさに心は燃え上がつて、命もあぶなく、どうすればいいか分らずに嘆き臥しているという。題詞に、あやうく黄泉路に赴くところだったと言っているように、もう死ぬかと思つたほどの重病であつたらしい。題詞の「枉疾に沈み」にも、その病が並大抵のものでなかつたことが想像される。

続く二月二十九日付の池主への書簡の冒頭に「忽ちに枉疾に沈み、累旬痛み苦しむ」と、病臥数十日とある。天平十八年十一月以来、十九年二月二十日まで歌の記録がないので分らないが、越中守として越中赴任の最初の正月元日の賀宴の歌がないのは不審で、歳末から床についていたのかも知れない。二月二十日で、ほぼ五十日の病臥である。

三月五日まで「臥レ病作之」とある。長い病臥であつた。天平十九年二月二十日は太陽暦で四月四日に当る。北国越中ももう春たけなわである。前年天平十八年が閏年で十三ヶ月あつたから、十九年は一ヶ月遅れたのである。天平十九年正月一日は太陽暦で二月十四日に当る。家持は越中の春を知らない。これが家持の越中での最初の春だったのである。病床に臥して戸外に出られない家持は、越中の春

咲く花を全く見ていない。家持はこの長歌に春の季節のこととは何一つ歌っていない。

反歌第一首は「世間は数なきものか」と歌つた。「世の中は空しきもの」と言つたのは、父大伴旅人であつた。

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり(巻五・七九三)

現世の人の生きるこの世間は空しくはかないものというのである。

山上憶良は集中最も多く「世間」を歌つた人であつた。

「世間の住り難きを哀しぶる歌」の冒頭に、

世間の すべなきものは 年月は 流るることし：

(巻五・八〇四)

と歌い、

：常なりし 笑まひ眉引 咲く花の 移ろひにけり

世の中は かくのみならし：(同、一に云はく)

と、世の中の移ろいを歌い、十八歳の前途ある若者の肥後国人大伴熊凝の京への旅路での死をまた、「世間はかくのみならし」(巻五・八八六)と詠嘆している。

旅人、憶良の筑紫に来るより前から造筑紫観世音寺別当として筑紫大宰府に下つて来ていた沙弥満誓は、世の中を、世間を何に譬へむ朝開き漕ぎ去にし船の跡無き如し

(巻三・三五二)

と歌った。大宰帥大伴旅人を中心とする大宰府での何らかの宴で歌われたものである。家持がその時大宰府に来ていたかどうかは不明だが、天平二年（七三〇）の夏以降だったら間違いない。家持は来ていた。その時家持は十三歳であった。それから九年、天平十一年夏六月に家持は愛妻を亡くし、二ヶ月に亘って短歌十一首、長歌一首の挽歌を詠み続けた。家持、二十二歳であった。その長歌の結びに、

：跡もなき 世間にあれば せむすべもなし（卷三・四六六）

と歌った。「跡もなき世の中」と歌った例は他にない。他に例のない家持の「跡もなき」は、沙弥満誓の「世間」を「朝開き漕ぎ去にし船の跡無き如し」と譬えたのを踏まえていとよみ取るほかはない。

その「世間は数なきもの」というのも、家持以前に例がない。しかし憶良が神亀二年に作ったという次の一首がある。

倭文手纏数にもあらぬ身にはあれど千年ちとせにもがと思ほ

ゆるかも（卷五・九〇三）

そして、大伴坂上郎女と兄弟姉妹のようなつきあいをしていたらしい安倍虫麻呂の一首、

倭文手纏数にもあらぬ命もて何かここだく吾が恋ひ渡る（卷四・六七二）

がある。また、中臣宅守の狭野弟上娘子を思ふ歌の中に、

塵泥ちりの数にもあらぬ我故に思ひわぶらむ妹がかなしき（卷十五・三七二七）

とある。この世の中にたまさかに生を享けたわが身を「数なきもの」と言うのであった。この世の中で物の数にも入らない卑しい身だというのである。「数なき（数にもあらぬ）」とは命のはかなさをいうのではない。命のはかなさは柿本人麻呂歌集の、

水の上に数書くごとき吾が命妹に逢はむとうけひつるかも（卷十一・二四三三）

と歌うのである。水の上に描いたものが一瞬にして跡形もなく消えることを命のはかなさのたとえにいうのは涅槃經にある。数を書くのに限らない。

「世間」を「数なきもの」と歌ったのは家持が最初であった。その家持は、己が数にもあらぬ身を思ったのだろう。その己のたまさかに生きるその命は「常無きもの」と知っている。

うつつせみの世は常無しと知るものを秋風寒み偲ひつるかも（卷三・四六五）

と歌った。「うつつせみの世」は「世間」であり、その世に生きるうつつせみの人である。家持の「世間は数なきものか」の「世間」はうつつせみの世の人を含み、その一人である己

れを意味しているのだろう。後に、天平勝宝八歳(七五六)六月十七日、同じく「病に臥して無常を悲しび、修道を欲して作る歌二首」の第一首に、

うつせみは数なき身なり山川の清けき見つつ道を尋ね  
な(巻二十・四四六八)

と歌っている。

世間は数なきものか春花の散りのまがひに死ぬべき思へば

この一首、原文は「世間」と「春花」のみ正訓字によっている。「世の中」を「世間」と表記したのは仏典によるものに違いないが、万葉集では人麻呂に始まる。「春花」と書いたのもまた漢詩などに学んだものだろうが、これも人麻呂に始まる(万葉集の「春花」については拙稿「『春花』と『秋の葉』」に詳説した)。

「春花の散りのまがひに死ぬべく思」うとは何と美しい死の映像だろう。「散りのまがひ」と訓んでいる集中の例は他

に三例ある。

：大船の 渡の山の 黄葉の 散りの乱に 妹が袖  
清にも見えず：(巻二・一三五、柿本人麻呂)

秋萩の散りの乱に呼び立てて鳴くなる鹿の声の遙けさ  
(巻八・一五五〇、湯原王)

あしひきの山下光るもみち葉の散りの麻河比は今日にもあるかも(巻十五・三七〇〇、天平八年遣新羅大使阿倍継麻呂)

家持に先行するこの「もみち葉」と「秋萩」の「散りのまがひ」にならって、「春花の散りのまがひ」を想像し、そこに自らの死を置いたのは、家持の独創である。

その「春花」は、その時特定の花はイメージされていないなかつたと思われる。このあと大伴池主と、書簡と歌と詩の交換が繰り返されるが、その中に、歌に歌われる「春の花」を追ってみよう。

家持

二月二十九日

3965 春の花今は盛りににはほふらむ  
3966 鶯の鳴き散らすらむ春の花

三月二日

池主

3967 山峡に咲けるさくらをただ一目君に見せてば  
3968 鶯の来鳴く山吹

三月 三日

3969 春花の 咲ける盛りに：春の野の 繁み飛びく  
く 鶯の 声だに聞かず

3970 あしひきの山さくら花一目だに君とし見てば

3971 山吹の繁み飛びくく鶯の声を聞くらむ君はとも  
しも

三月 五日

家持の歌は二十九日も「春の花」としか歌わない。これが池主宛第一書簡であった。

春の花今は盛りにほふるむ、折りてかざさむ手力も  
がも（巻十七・三九六五）

鶯の鳴き散らすらむ春の花 いつしか君と手折りかざ  
さむ（同・三九六六）

「にほふるむ」「散らすらむ」といづれも想像である。その「春の花」を手折りかざす腕力さえも今はない。いつか野に出て君と共にその「春の花」を手折りかざそうと願うばかりである。

三月二日の池主からの返書の歌に始めて花の名が詠まれた。

山峡に咲けるさくらをただ一目君に見せては何をか思  
はむ（同・三九六七）

鶯の来鳴く山吹うたがたも君が手触れず花散らめやも

3973 山びにはさくら花散り容鳥の間なくしば鳴く  
3974 山吹は日に日に咲きぬ

（同・三九六八）

家持に見せたいと池主が選んだ「春の花」が「山桜」と「山吹」だったのである。それ以後、二人の間にこの二つの「春の花」が歌い交わされることになる。

二月二十日の家持の「春花の散りのまがひに死ぬべく思」  
つたという花を、ここではまだ桜花と読んでほならない。

三

昭和二十五年八月、山田孝雄博士著『萬葉五賦』が「美  
夫君志会選書第一篇」として上梓された。その「序」に、  
萬葉集卷十七に、二上山賦をはじめとし、長歌を賦と  
名づくるもの五首あり。而してそはいづれも越中の勝  
景を詠せるものにして、越中守大伴宿祢家持と越中掾  
大伴宿祢池主との唱和によるものなり。  
とある。その五賦とは次の通りである。

二上山賦一首（大伴家持作）

遊二覽布勢水海一賦一首（大伴家持作）

敬和と遊二覽布勢水海一賦上二一首（大伴池主作）

立山賦一首（大伴家持作）

敬和と立山賦二一首（大伴池主作）

池主作の「敬和」の二首についても、それぞれ「賦」に「和する一首」であるから「賦」と題するものと同じに、山田博士は扱われた。しかし正しく「賦」と題したのは家持の三首であるから、それを普通「越中三賦」という。万葉集に長歌を「賦」と題するものはこの三首しかない。

「賦」とは言うまでもなく中国の古代の詩文の形式の一つである。『漢書』の「芸文志」に「歌はずして誦する、これを賦といふ」とある。歌は旋律にのせるが、その旋律によらないで朗誦するのが「賦」だという。脚韻をふみ、修辭をこらし、音調とリズムをそろえた、朗誦するに足る調子の整った、いわば散文詩である。『文選』六十卷が「賦」から始まる。その第一卷「賦甲」から「賦乙」「賦丙」と続いて第十九卷「賦癸」まで。「班孟堅兩都賦二首」に始まって「張平子西京賦一首」「同東京賦一首」「同南都賦一首」「左太沖三都賦序一首」など五十七首に及ぶ。続いて「詩」である。「賦」が都ぼめ、国ぼめにふさわしい文体であった。

家持は彼の生涯に始めて、越中国府に隣接する、その名

もゆかしい二上山の讃歌を試みた。それを『文選』の「兩都賦」「三都賦」などにならって「二上山賦」と名づけたのである。二上山の実景に感動して作歌意欲を衝き動かされて作ったのではないことは、その表現から明らかで、その作歌動機を自ら「興に依りて作る」と左注に記している。このあと家持は自らの歌にこのように「依興作」と特記する場合が「興中所作之歌」と記す一例を含めて九例ある。全十例のこの特記をどう読むか、その記載の意味を私は二度にわたって論じている。

その「依興作」と特記した最初がこの「二上山賦」であった。その天平十九年三月三十日の前後の家持の作歌を表示してみよう。

三月五日 3976 3977

短歌二首へ病臥作の最後

同二十日 3978 3982

恋緒を述ぶる歌

同二十九日 3983 3984

立夏四月既に累日を経ぬるに、なほし未だ霍公鳥の喧くを聞かず。

因りて作る恨みの歌

同三十日 3985 3987

二上山賦

四月十六日 3988

夜裏に遙かに霍公鳥の喧くを聞き

て懷を述ぶる歌

三月五日の後、間もなく家持は本復しただろうと思われる。十五日間歌の記載がないのは、病臥中滞っていた国守

の政務に没頭していたのだろう。そして三月二十日、左注によればその夜にわかに都に残した妻への恋情を起して長歌一首、反歌四首を作った。長歌に、遠く離れてひとり寝の恋しさを歌ったあと、

：ほととぎす 来鳴かむ月に いつしかも 早くなり  
なむ 卯の花の にほへる山を よそのみも 振り放  
け見つつ 近江路に い行き乗り立ち あをによし  
奈良の我家に……我を待つと 寝すらむ妹を 逢ひて  
早見む（巻十七・三九七八）

とある。ほととぎすの鳴く月になったら近江路を通って、妻の待つ都へ帰る予定が出来たらしい。正税帳使としての上京が決まったのだろう。それが夜になって妻恋しさをつのらせたのであった。「ほととぎす来鳴かむ月に いつしかも早くなりなむ」の思いが、立夏の日が来ててもほととぎすが鳴かない北国越中への恨めしい思いとなつて、二十九日の二首が出来、その翌日「二上山賦」が作られた。

三月二十日からの歌の左注にはそれぞれの作歌事情が記されている。

三月二十日 夜裏に、忽ちに恋情を起こして作る。  
同二十九日 霍公鳥は立夏の日に、来鳴くこと必定な

り。また越中の風土は、橙橘のあること  
希らなり。これに因りて、家持懐に感発

して、聊かにこの歌を裁る。  
同三十日（二上山賦）興に依りて作る。

三月二十日は「忽ちに恋情を起して作」り、二十九日は「懐に感発して、聊かにこの歌を裁」り、三十日は「興に依りて作」ったのである。「二上山賦」だけ「興に依りて作」ったのである。その依って作ったという「興」は単に感興ではあり得ず、十例全部に亘って考察した結果、それは歌を作るという「興」、現実から離れて想像の世界を描こうとする心であろうと私は論じた<sup>3</sup>。家持は「予作歌」を「興に依りて作る」と言い、「追和歌」を「興に依りて作る」と言うのである。

「二上山賦」という、文学史上初めての「賦」と題する山ほめの歌を「興に依りて作」ったのであった。それは家持の初めての作業であった。その時「興に依りて」以外に作歌の理由はなかったのである。

それから二十日後の四月二十日、大目秦八千鳴の館で家持の餞別の宴が開かれ、二十四日に「遊覧布勢水海賦」が作られ、その二日後の二十六日に池主の「敬和遊覧布勢水海賦一首」が追和の形で作られたと記され、その日に池主の館で第二回目の餞別の宴が開かれ、またその同じ日に家持の館で酒宴を催している。二次会でもあろうか。

続いて四月二十七日、家持は「立山賦」を作り、翌二十



八日、池主はまた「敬和立山賦一首」を作つて和したのであつた。

四月三十日、家持は池主にしばしの別れを悲しむ歌を贈り、五月二日に池主がそれに「報へ和する歌」を贈つたのを最後に、家持は上京して行つた。

「遊覽布勢水海賦」はその題の通り、布勢水海に越中国序の官人たちが遊覽する実景を歌つたものである。布勢水海への道行きと船を浮べての遊覽と水海の美しいことを歌つて、

…あり通ひ いや年のはに 思ふどち かくし遊ばむ  
今も見ること（卷十七・三九九一）

と結び、その反歌は、

布勢の海の沖つ白波あり通ひいや年のはに見つつ偲はむ（同・三九九二）  
と繰り返す。

「立山賦」はその山をうしはく神の尊さを讃えて、常夏に雪降り敷くさまとその山の帯にする片貝川の清らかな瀬を歌つて、

…あり通ひ いや年のはに よそのみも 振り放け見  
つつ 万代の 語らひ草と いまだ見ぬ 人にも告げ  
む、音のみも 名のみも聞きて 羨しぶるがね（同・

四〇〇〇）

と結び、反歌はその常夏の雪と片貝川の瀬を受けて、

立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし（同・四〇〇一）

片貝の川の瀬清く行く水の絶ゆることなくあり通ひ見む（同・四〇〇二）

とある。長歌に「あり通ひいや年のはに」と歌っているのは「遊覽布勢水海賦」の長・反歌に繰り返した第一テーマであつた。そして「いまだ見ぬ人にも告げむ」と長歌に言う。それは反歌第二首に「絶ゆることなくあり通ひ見む」と対応するだろう。

遊覽布勢水海賦〈長歌〉かくし遊ばむ

同 〈反歌〉見つつ偲はむ

立山賦 〈長歌〉人にも告げむ

同 〈反歌第二首〉あり通ひ見む

右のようにそれぞれ結びの語はいずれも作者家持を主格とする行為の意志表現で共通している。それはこの「布勢水海賦」と「立山賦」とは、題材は水海と山と異なり、その構想・内容は全く異なるけれども、作歌の動機・意図は同じであつたと読み取つていいだろう。そしてこの両賦が共に、池主の「敬和」の歌を持つことは、家持を都に贈る饗宴で披露された歌であつたことを物語る。

それに対して「立山賦」は「依興作」であつた。「興に

依りて作る」以外に目的を持たない、「独詠歌」であった。その結びの語は、

二上山賦〈長歌〉 いや増しに 絶ゆることなく 古ゆ

今の現まうらに かくしこそ 見る人ご

とに かけて惚はめ

同 〈反歌第一首〉 いやしくしくに古思ほゆ

同 〈反歌第二首〉 二上山に鳴く鳥の声の恋しき時は来

にけり

と、客観描写に徹している。作者家持の主観的表現といえ、反歌第二首の「古思ほゆ」だけである。

いわゆる「越中三賦」について、その作歌動機の違いを読み誤ってはならない。夙に山田孝雄博士『萬葉五賦』に、三月三十日に詠める「二上山賦」は、京へ上りての語らひ草とせむの下構にてよめるならむか。而して、この心は下の賦に至りて頗る著しくなれり。ここに家持が特に「賦」といへるには、上にいふ如き心が暗々裡に動きつゝ、ありしと共に、都人士に語らひ草として見せむの下心もありしならむと思はる。

と述べ、「立山賦」の解説のあとに、

かくて、四月末に入京せむ予定なりしが故に、京への語り草として越中の佳景を伝へむが為、二上山・布勢水海・立山等の賦をもせしならむ。

とある。「越中三賦」をそろえて家持の都の人々への手土産代わりという読みはここに始まるのだった。

#### 四

家持独自の作歌についての注記である「依興作」は九例、「興中所作之歌」と記すのは一例である。「興中所作」は「依興作」の三例目、天平十九年三月三十日の「二上山賦」から三年目、天平勝宝二年三月九日の作品である。「依興作」と記すのが普通で、「興中所作」と記すのは「依興作」とはどこか違うところがあるのだろう。

「興に依りて作る」のは一首であり、一件の作歌である。「興の中に作る歌」は三件の歌をまとめた注記である。三件の作歌にその「興」はわたるのである。

1 世間の無常を悲しぶる歌

2 予め作る七夕の歌

3 勇士の名を振はむことを慕ふ歌（追ひて山上憶良臣の作れる歌に和ふ）

この三件の歌にわたる「興」は何に関わるものであったか。

1「悲世間無常歌」が山上憶良の「哀世間難住歌」（巻五・八〇四）とその題詞も類似し、類句もあり、その影響を受けて成ったことは明らかである。しかし、その憶良の歌に

追和する作ではない。家持の独自の創作なのであった。家持の無常思想の文芸化なのだと言えようか。

3 「勇士の名を振はむことを慕ふ歌」は左注に記されているように、憶良の歌に追和して作ったものだった。その歌は憶良の辞世の歌と言われる「沈痾の時の歌」、

士まのこやも空しくあるべき 万代に語り継ぐべき名を立てずして（巻六・九七八）

である。この短歌一首を家持は長歌一首と反歌一首に仕立て上げた。

1、3は共に山上憶良の歌がヒントになって、自らの創作を成した。自らのイマジネーションを繰り広げた。その制作の動機と力をなすものが家持の「興」だと言えるのではないか。

そして2「予作七夕歌」を発想せしめたのは、やはり憶良だったのではないか。1が挽歌であり、3は勇士の名を立つことを願う歌、雑歌であろう。2は相聞でありたい。憶良に「相聞歌」は「七夕歌」を措いて、ない。

天平勝宝二年三月九日、出挙の政務のために旧江村かむら.えへ行つた。ここに問題が出来したのだろうか。国守としての務めである。筑前国守山上憶良老を思い起すことがあったのだろうか。それは、国府から旧江村への道中、渋谿の崎の巖の上に根をはっているつままの老木を見て、

磯の上のつままを見れば根を延へて年深からし神さびにけり（巻十九・四一五九）

と歌った時、そこから憶良老国守がイメージされたのだろうか。

私なりの「読み」である。

#### 注

(1) 拙稿「春の花」と「秋の葉」は尾畑喜一郎博士古稀記念論文集「記紀万葉の新研究」（桜楓社、平成4年12月）所収。

(2) 拙稿「家持の依興歌」は『論集上代文学』第四冊（笠間書院、昭和48年12月）に発表、拙著『大伴家持研究』（笠間書院、昭和55年3月）に再録した。続いて「大伴家持の依興歌追攷」は『論集上代文学』第十三冊（笠間書院、昭和59年3月）に発表した。

(3) 注2に同じ。

(4) 「依興作」の第二例、巻十八・四一〇五左注は、その「為贈京家願真珠歌」（四一〇一―四一〇五）と、その直前の「為幸行芳野離宮之時儲作歌」（四〇九八―四一〇〇）が作歌年時の左注もないので、そこまでかかると解される。そうすると二件のテーマを異にする歌にかかるとなる。注2に記した「大伴家持の依興歌追攷」に、先の「吉野行幸儲作歌」の帰属について迷いつつ、結論としては

「依興作歌」に入れたが、今また「依興作」と「興中所作」の比較から、「依興作」の左注は一件だけにかかるということにしたいと考えている。

(5) 拙稿「大伴家持の依興歌追攷」では、その終りに「興」の中で作られた三作はなぜこの道中でそれが発想されたのか分からない、例えば、なぜ春三月に突然「七夕」の歌を作る気になったのか分からないと記している。ここに改めてそれを考えてみた。